

e シンキング (ひとづくり広域連合政策情報メルマガ) 第 2 2 号
2 0 0 6 / 8 / 1 5 発行 (月 1 回発行)

各職員に、転送または配布をお願いします。

目 次

[今月のトピックス]

「再チャレンジ支援策」

[政策研究の紹介]

「行財政改革政策提言プロジェクト」(富士見市)

[私の選んだこの1冊]

「上品な人、下品な人」(山崎武也著 / PHP 新書)

[みてきたゾウ・つたえるゾウ!!]

「第3回道路愛護の集い」(埼玉県、さいたま市、埼玉県道路協会主催)

[今月のトピックス]

「再チャレンジ支援策」

小泉内閣の改革路線で、「格差社会」が生み出されたと言われていいます。こうした批判を受け、再挑戦が可能となる社会の仕組みについて政府全体として取り組むため、平成18年3月、内閣官房長官を議長とし、各府省の局長クラ

スを中心に広く構成員を集めて「多様な機会のある社会」推進会議（再チャレンジ推進会議）が発足しました。

5月末には、同会議の中間取りまとめが行われ、人生の各段階で多様な選択肢が用意され、「勝ち組、負け組」を固定させない社会を「再チャレンジ可能な社会」と位置づけ、それを可能とする柔軟で多様な社会の仕組みを構築するとともに、国民一人一人の個別の事情に応じた再チャレンジ支援策を講じていくこととしました。また、7月に政府が発表した「骨太の方針 2006」にも、中間取りまとめに盛りこまれた施策を推進することがうたわれています。

具体的施策としては、「働き方の複線化」や「若者、女性、高齢者・団塊世代の再チャレンジ」などを柱に、30～40歳程度のフリーター等にも国家公務員への就職機会を与える仕組みを構築すること、パート労働者への社会保険の適用拡大、出産・育児等で離職した女性の再就職支援、70歳まで働ける企業の普及促進などが盛り込まれています。また、フリーター数を2010年までに2003年ピーク時（217万人）の8割に減らす目標などが明示されています。

このほか、再チャレンジを各地域においても幅広く推進するため、住民や民間団体、民間企業等多様な主体が行政と協働するための再チャレンジ推進地域会議の設置等、地方公共団体の取組を促進することなどがうたわれています。（ISO）

[政策研究の紹介]

「行財政改革政策提言プロジェクト」(富士見市)

本市では、「富士見市行政経営戦略会議」からの提言を受け、平成18年4月25日に「行財政改革政策提言プロジェクトチーム」を発足しました。

本プロジェクトは、若手職員の柔軟な発想やアイデアを活かし、本市の行財政改革の一層の推進を図るとともに、人材育成の観点から、若い職員のやる気を引き出すことを目的としたものです。公募により募集したところ、主査級以下の職員20人より応募がありました。

プロジェクトは、「組織活性化戦略推進チーム」7人、「財務体質改善戦略推進チーム」7人、「民間活力活用戦略推進チーム」6人の3つのグループに分かれております。研究内容は、行財政改革に関する政策研究をテーマ

としており、活動期間は4月下旬から9月下旬までの5か月間となっております。7月14日には「中間報告会」が実施され、研究活動の中間報告がされたところです。

現在、最終の報告会に向けてそれぞれのチームが、研究活動を意欲的に取り組んでいるところですが、このプロジェクトチームの活動については、提言をいただいた「富士見市行政経営戦略会議」委員の皆さんから、直接、指導・助言をいただきながら研究を進めております。今回のプロジェクトの研究成果として、最終的に実効性がある政策提言については、来年度予算に反映させ、実行することになっておりますので、それだけに、研究員にとってもやりがいのあるものとなっております。

市としても、富士見市を良くしたいという強い意思を持ち、行財政改革に強い意欲のある職員から、10月下旬に予定されている「最終報告会」でどのような素晴らしい政策提言があるのかと、各プロジェクトチームに大きな期待を寄せているところです。(T)

[私の選んだこの1冊]

「上品な人、下品な人」 山崎武也著 / PHP新書

皆さんの周りには、「仕事の責任は逃れて手柄だけはしっかり奪う」なんて人はまさかいらっしやらないと思いますが、よく電車の中とかで、「人を押しつけて席を取ったり」する人を見たりしませんか？

この本では、「人のふり見て・・・」ということで、品が悪いと思われる例を挙げながらどのようにしたら自分の品がよくなるかについて考察しています。冒頭の電車内の例で言えば、『席という一時的な便利さと楽を手に入れて、代わりに品を失うのは、到底、割の合うことではない。品は一度失ってしまったら、それを取り返すためには多大な時間とエネルギーを必要とする。』といったことが書かれています。他にも、「忙しい」をやたら吹聴することとか、机の上を散らかし放題にすることなど、「まあ、言われてみるとそのとおりだな。気をつけないと。」と注意を喚起してくれることが紹介されています。

確かに、筆者もあとがきで「忸怩（じくじ）たる感じで」と述べているように、他の人の下品な言動についてとやかく言うこと自体、品がよいことではないかもしれません。しかし、周りに不快感を与える言動を自分がしないよう日

ごろから気を付けることは、単に個人を精神的に豊かにするにとどまらず、個々の職場、さらには公務員の世界全体でも、以下に申し上げるような参考になる点があるのではないかと考え、小生はこの本を紹介させていただいた次第です。

まず、品を高めようとしたら、当然、自分の欲を抑え、他の人への謙虚な思いやりが必要となります。職場レベルで見れば、一人ひとりがお互いを尊重しあうことによって信頼関係が生まれ、良好なコミュニケーションが図られ、風通しのよい職場が実現するのではないのでしょうか。特に組織のIT化・フラット化が進んだ影響で個々のつながりが薄れてきている今こそ、コミュニケーションを円滑にして職場を活性化する必要があると思います。

次に、「誰かに見られている」という意識をいつも有していれば、(よほどの人を除き)品のない言動などしないはずです。また、品の良い振る舞いをするには「世間の常識をわきまえる」ことが必要不可欠です。公務員の世界においても、「危機管理の要諦」とも言われるこれらの意識を各職員が持ち続けていれば、職業人としての倫理がきちんと確立され、(ありえない・あってはならない)不祥事の発生を抑えられると思います。また、想定を超える予測不能な緊急事態に直面したとしても、これらの意識を基に適切な対応が取れると考えられます。

以上、人品骨柄を高めることの効用について申し上げて参りましたが、ふと気がつく、参考資料などで机の上がスゴイことになっているではありませんか!「もしかしたらこの人、頭の中も机上と同様に混沌としてるんじゃないの?こんな人に仕事任せて大丈夫?」と周りの人に不安を与えないためにも、すぐに片付けたいと思います。(east boy)

[みてきたゾウ・つたえるゾウ!!]

「第3回道路愛護の集い」～市民生活の復旧を助ける災害ボランティア～
(2月11日 埼玉会館 主催：埼玉県、さいたま市、埼玉県道路協会)

本年2月11日埼玉会館小ホールにおいて「第3回道路愛護の集い」が開催されました。この集いは、日頃、道路をステージに道路愛護活動を展開しているボランティア団体の方々の意見交換、活動報告の場として設けられたものです。

集いでは毎回、道路愛護やボランティアに関する講演会を行っておりますが、今回は、災害ボランティアの支援に力を注いでいる、NPO法人ふくい災害ボランティアネット理事長の松森和人さんに「大規模災害発生時におけるボランティアの役割」と題してご講演いただきました。

災害ボランティアといえば、1995年の阪神大震災や1997年のロシアのタンカー、ナホトカ号重油流出事故で海岸に漂着した重油回収のため、全国から10万人のボランティアが集まりました。阪神大震災以降、災害ボランティアが脚光を浴び、重油流出事故の際にも多くの災害ボランティアが集まったのです。

当時からボランティア活動を行っていた松森さんは、重油流出事故の際、災害ボランティアの受入体制が構築されておらず、「福井にきたボランティアが十分活動できずに帰った。」という経験から、NPO法人ふくい災害ボランティアネットを立ち上げ、災害ボランティア支援体制の構築に努めてきたのです。

2年前の平成16年7月18日、福井市内の足羽川が決壊する福井豪雨災害が発生しました。

実は、松森さん達、NPO法人ふくい災害ボランティアネットのスタッフは、福井豪雨災害発生の際は、5日前の7月13日に発生した新潟豪雨災害の支援のため、7月17日に新潟に入り、災害ボランティア支援体制の構築に動いておりました。

7月18日、午前10時、地元の仲間から「福井で時間雨量87ミリ、異常降雨である。」との報告を新潟で受けると、直ちに福井に帰ることを決断しました。午後1時45分、福井に戻る高速道路の車中で「福井市中心部の足羽川が決壊した。」との報告を受けた時、高速道路のパーキングエリアにメンバーを集め、今後の体制づくりを話し合ったそうです。

福井に戻るとすぐにボランティアセンターの立ち上げに取組み、同日、午後7時には行政と協働で運営する「福井県水害ボランティア本部」を設置しました。そして、

6万人のボランティアを集める。

運営資金1億円を確保する。

1日1万人の受け入れ態勢を4日以内に整備する。

各現地ボランティアセンターを3日以内に開設する。

などの活動目標をたて、早期復旧に全力を尽くしました。

災害ボランティアは、被災した家の復旧、生活の復旧に力を注いでくれます。被災した家を片づけるのに、泥を含んだ畳を運んで、床を外し、床下の泥を片づけます。8畳間一つ泥を片づけるのに約200袋、家1軒で約1,500袋

の土のうができ、それを搬出したということです。

1軒の家に述べ約120人のボランティアが入ったところもあり、水洗いした床が張られると、「なんとか、この家で暮らせそうだ。」と、これから先の生活が見えて、やっと、被災者の顔に笑顔が戻るようになったということです。

本人曰く、福井豪雨では、何とか混乱無く、一応目標どおり達成できた。それは、ナホトカでのつらい思いを大事にし、ボランティアとして積み上げてきた「その思い」。行政も一緒になって歩んできた「被災者を思う心」。そして、「絶対にあきらめないという心」。だと言っております。

被災した市民の災害復旧にあたっては、家屋、生活を早期に、着実に、もれなく復旧させることが重要であり、そのためには、災害ボランティアが大きな役割を負っております。コミュニティの崩壊や高齢化などにより、地域力が弱まった現在、災害発生時に市民生活の復旧に力を注いでくれるのは、災害ボランティアの皆さんなのです。

この災害ボランティアの活動を効率よく、コーディネートすることが、市民生活の早期復旧に繋がります。そして、それを支えているのは、松森さんのような被災者を救いたいという心を持った人たちであります。首都圏での災害発生が心配されている中、災害ボランティア活用の体制づくりが求められていると思います。

松森さんの講演の様子は、2006.2.11開催「第3回道路愛護の集い報告書」(埼玉県道路協会：事務局 埼玉県県土整備部道路環境課)に掲載しておりますので、興味のある方は、是非、ご覧いただきたいと存じます。
(吉野)

=====

[編集後記]

先日、ある雑誌を読んでいると、サッカー日本代表の監督：イビチャ・オシム氏の記事が掲載されておりました。そこには彼独特の、エスプリの利いた発言が取り上げられておりました。

例えば「走りすぎても死なない」「本当に強いチームというのは夢を見るのではなく、できることをやるものだ」「私は選手が変わろうとする手助けをするだけ。重要なことは選手に『もっとできる』と思わせることだ」という言葉です。

ただ、これらの言葉は何もサッカー選手に限られたものではなく、個人の意識やリーダー(監督者)あるいは組織としてのあり方についても通ずるものがあります。今後も、代表監督の発言には注目していきたいと思っています。(B)

=====

[e シンキング]

ご意見・掲載希望

今月号では、上記「行財政改革政策提言プロジェクト」について、富士見市職員課より、また「第3回道路愛護の集い」について、埼玉県都市計画課：吉野さんより情報提供いただきまして、ありがとうございました。

こうした、[政策研究の紹介] [私の選んだこの1冊] セミナー等の参加レポートを随時募集しています。是非下記担当までご連絡ください。

発行元

彩の国さいたま人づくり広域連合 政策管理部（小澤・江森）

〒331-0804 さいたま市北区土呂町2 - 24 - 1

TEL:048-664-6681 FAX:048-664-6667

WebPage: <http://www.hitozukuri.or.jp/jinzai/>

E-Mail: jinzai03@hitozukuri.or.jp
